



雪水 ひなた

田舎に移住し、田舎暮らしを楽しんでいる女。人から虫が沢山現れるスポットを教わり下見に行くが、そこで人でないものを目撃する。その場を後にしようとするが、運悪く崖から転落し動けなくなってしまう。もともと変態じみた性格だったが、最近は改善されたとか……。

年齢＝恋人なし



鬼蓮 椿

動けなくなったひなたを助けた女性。髪が赤い。その風貌には似合わず、礼儀正しく大変親切。怪我をしたひなたを自宅に連れて行き、治療するとともに世話をするといい出す。華奢な割に力が非常に強い。人里から離れているが、家はもともと旅館だったという。



鬼蓮 竜胆

椿の夫。顔に大きな傷があり物騒に見えるが、妻の椿同様、非常に親切。椿が連れ帰ったひなたを快く受け入れる。仕事でよく家を空けており、帰ってくることも遅い。だが、椿のことを誰よりも大切に思っている。

こんにちは。

じいちゃんの遺産を受け継いで、田舎に移住した者です。

街中のような利便性はありませんが、ご飯は美味しいし、空気は綺麗だし、排他的でもなく人も親切で友好的です。

なんだか、そのおかげか肌の艶もよくなり若返った気分です。

かつては煩惱まみれだった私の心は、綺麗に浄化されました。

今に思えば、かつての私は変態だった……。中学生男子のようでした。

こつちに来てから色々ありました。充実した毎日、菜園を

作って世話をしたり、山菜取りに出かけたり、やや離れているけど

ご近所さんとお茶をしばきつつ駄弁ったりと、素晴らしき

スローライフを満喫しています。

さて、そんな私の毎日ですが………

「……うう……イタタ……ツつう……」

いきなり、大ピンチ……。

たつた今、崖から転がり落ちました。

履物も落ちる過程でどこかにいってしまった……。

こんな軽装で山に入ったツケか……。



何故こんなことになったのか……。それは遡る事十分程前……。


私は人に、螢が沢山出沒する泉がこの山中にあると聞き、やって来ていた。螢といえは夜だが、いきなり夜に来るのは危険なため、一度どこにあるのか確認しに来たのだ。

すぐにすむと思ひ輕装できたのだが、思ひのほか辿り着かない……。これはまずいと思つたとき、ちやぶちやぶと水の音が聞こえ、そこに近づいていった。



木をかき分けて行くと、そこには確かに泉があった。

そろそろ、この格好では危ういかと思つた矢先だったので、ホツとしたのだが、なにやら人の気配を感じた。



そつと木を更にかき分けて覗くと、白い綺麗な背中と、丸く形のいいお尻が目に入った。女の人が、水浴びをしてる……。

「……」

ここで、私がとる行動は二通りある。

一、蛍のスポットは確認できた。このままこの場を去る。

二、折角の出会いだ。声をかけ、友好の幅を広げる。

……私は二を選ぶことにした。見た感じ、若い後姿だ。人の限られたこの田舎……フレッシュな友人は貴重ではないか？

そう思い、私は話しかけてみようかと近づこうとした。

「……………」

私は、極力音を立てないようにして、その場を離れることにした。



慌てず……でも素早く……。

そして、再び茂みの後ろまで移動した。

「い、いいいい今のなに？今のなんなの!？」

角……角があった……。それに髪も不自然に赤くて……。

……お……鬼!?……よ……妖怪だ……。河童とかそういう次元のじゃない。鬼っていえばあれだ。人を攫って食ったり犯したり……。

昔話の悪役の代名詞……!

私は、あたふたとしながら走っていたのだが、それがまずかった……。足場が草木で隠れ、斜面があることに気が付かなかったのだ。

「……う……うわわ!？」

足を滑らせそのままゴロゴロと転がった。そこらへんに生えている小さな木などを掴めばよかったのだが、気が動転していた……。

「わ、わわわわ!？」

止まることなどできず転がり続けた挙句、突如体が宙を舞った。

「……え……え……?」

転がり続けた終着点は崖だった。

「のわあああああああ!？」

「ぐえっ!？」

こうして、私は崖下に転落してしまっただというわけだ……。



「……うう……なんてこつたい……」

ぐぐつと顔を上に向けてみる。15メートル程の切り立った崖の岩肌が私を見下ろしている……。

「……！こうしちゃいられない！

早く移動しないと……。

さっきの悲鳴で鬼が来るかも……！」

そう思い私は慌てて体を起こそうとした。



「ッ!? いったあ ああああ!?」

足首、手首、腰……その他の体の箇所から雷に打たれたかのような
激痛が走った。

「あ……当たり前か……」

転がりがまくって、崖から落ちたんだし……。

でも、移動しないと……。

そう思うのに反し、痛みで動くことが困難だった……。



ど、どうしよう…もし、このまま鬼が来たら…。
いや、猪や熊、野犬…危険なものはいくらでもある…。
もし、このまま夜になったら…。
私は怖くなって泣きそうになっていた。

「……あ、あの、大丈夫ですか!？」



「……へ……？」

意外なことに、こんな山中で私の安否を気遣う声が聞こえてきた。
一瞬耳を疑ったが、声の方向を見ると……



一人の若い女性が、私の方に駆け寄ってきた。

「凄い悲鳴が聞こえてきましたよ……？あの……もしもし？」

多分、私は顔面蒼白だったかと思う……。だってさっきの鬼と同じ髪の色……

でも……角はないし……。頭の中が混乱した……。

「も、もしかして、頭とか強く打ちました!? た、大変！」

あの、この指何本に見えます?! い、意識ありますか!」

そう言って、女性は指を三本立てた。私は咄嗟に

「さ……三本……」と返した。

「あ！よ、よかったあ……意識はありますね？あの……大丈夫ですか？」
女性は悪意のない表情で、私の状態を気遣ってきた。

「……あ……はい……でもちよつと、体を強く打ちまして……腰とか……痛いです……」

「……この人……さっきの鬼なんじゃ……という猜疑心はまだある。」



「……斜面を転がり落ちた挙句、この崖から落ちたんですね……？」

「……もしかしたら、骨とか折ってるんじゃない……」

「い、いえいえそんな大それたことでは！」

「鬼だったら……鬼だったら……！そう思い、私は取り繕おうとする……」

「とにかく、膝も擦りむいてますから私の家に……。治療しないと」

「あ……ヤバイ……」

「そ、そんな面倒をかけるわけにはいきませんって！こんな睡つけとけば……」
「このままではお持ち帰りされてしまう……！とにかくここを切り抜けて、這って
でも家に帰ろう……！」

「だ、だから、大丈夫です！少し休んでれば……」

「フフ、そんな遠慮しなくてもいいですから。それに、けが人を目の前にして、
そのままになんて出来ませんよ？」



「さ、私の背中にごうぞ。そんな遠慮せずにお世話させていただきます」

「あ、あ……ああ……あの！」

驚いたことにこの人は軽々と私を持ち上げて、私をおぶってしまった。

「はい、「名様ご案内!……ふふ」

目の前で女性の髪がふわりと揺れ、優しい良い匂い香った。

「あ……あの、こんなことしてもらわなくても……」

わ、私……重いでしょ？だ……だから……」

「いいえ？とつても軽いじゃないですか。駄目ですよ？困ったときは人を頼らないと」

……そ……そうだ、まだこの人が鬼と決まったわけじゃない……

ポジティブに……ポジティブに考えよう……そう、この人は田舎に

住む、ビジュアル系好き……。だから髪が赤いんだって……うん……！

それにきつきのだったただの見間違えかもしれないし……。



「それにしても、こんな所にあなたみたいなのがいるのは珍しい
ですね？町のほうから山菜採りとかですか？」

ほ、ほら、こんなにフレンドリーだし……！！

「い、いえ…：ちよつと前にこつちに越してきたんです…：」

「そんなんですか！お住まいはどちら？」

ちよつと、個人情報を開示しすぎるのもどうかと思うけど…：

「えつと…：あつちの山向ここの村に…：」

少しぼかすことにした。が、その答えに対して女性は…：



「…え…：!?大変!」

「え!？」

驚いたように声を上げた。

「このあたりから、歩いてあつちに行くには、決まった山道を

通らないといけないんです。でも、何日か前に土砂崩れがあつて
その道…今塞がっちゃつてるんですよ！」

「……え……？……ええ!？」

「じゃなければ、あの崖をよじ登るか、岩場の傾斜に行く位しか
ないですけど……大人の男性でも大変なところですよ……？」

……この体じゃ、どう考えても無理だ……。



「今、その山道を夫が見に行つてゐるはずなんですけど……」

「……あ……あう……あう……」

私はどうしたらいいのかと、口をパクパクとさせた。

い、家に帰れない……。ていうか、この人結婚してるんだ。

「う……ううう……何でこうなるの……。の……野宿……？」

野宿はいやだあ……」

「あは……あははは……お気の毒です……。で、でも、心配しないで
ください。これも何かの縁ですから、私の家に泊まってくださいいな。
小さいですが昔は旅館やってたんです。だから、温泉ありますよ？」

「お、温泉!？」

現金なものだがその言葉に大いに反応した。温泉、お風呂大好き……。



「はい、旅館やってた頃の名残もあって、私達夫婦は家じゃ和服なんで
すよ？あなたの……お客様用の浴衣も、用意しますね」

ああ……優しい人……。

「そういえば……まだお名前を聞いてませんでしたね……。私、

鬼蓮(オニハス)椿って言います。椿でいいですよ」

「あ……私は、雪水ひなたって言います。ひなたでいいです」

「ひなた……?……あの、ひなちゃんって呼んでいいですか?」

「え?ひなちゃん?……はい、いいですよ」

「ちよつと小恥ずかしかったけど……」



「それじゃ、よろしくお願ひします。ひなちゃん」

「ご、ごちらこそ、椿さん」

椿さんの背に揺られること30分ほどで、少し大きめの古民家のような建物に着いた。もともと温泉旅館……。まさに、ひなびた旅館そのもの。いい……。すごく……。いいです……。

椿さんは、私を空いていた部屋に連れて行った。

「とりあえず、治療はここでしましょうね。お客様用のお部屋はしばらく使っていなかったから、ちよつと整理してから案内させていただきますね」

「す、すみません。でも、厄介になるのにお客様なんて……」

「いえいえ、お気になさらずに！あ、当然、御代なんて頂きませんから。もともと旅館とはいえ、無償でお願いしますよ？」

そう言うと椿さんはニツコリと笑った。

なにからなにまで至れり尽くせりだった。

そして、椿さんは、手馴れた感じで私の痛む箇所を診て膏薬を塗ったり、包帯を巻いたりと手際よく処置をしてくれた。

椿さんによると、多数打撲、捻挫、擦り傷。特に右手、左足の捻挫が酷いようだ。ただ、骨には損傷はないとのことだ。
それに、椿さんがつけてくれた薬のおかげで痛みが不思議なほど引いていった……。

「ありがとうございます……。かなり楽になりました」

「ふふ、どういたしまして。それにしても、あの高さから落ちてこれですんで本当によかったです。もし折れてたら、薬だけじゃどうしようもありませんでした」



「……私、頑丈なんです……。ちよつと馴れてますから」

「え？」

「……子供の頃、太眉ブスとか言われてよく高い所から突き落とされた
りしまして……。その頃から、あまり大きな怪我とかなかったのので」



あまりに親切にされたもので、つい、陰気な暗い過去を話して
しまった……。



「そ、そんな……酷いです……。可愛いじゃないですか……」

「か、かわ……!? あはは……まあ、助けしてくれる男の子もいましたし、
そんな酷い過去でもないですよ。その男の子、当時の私にとっては
ヒーローでしたし……」

正直、名前も顔も覚えてなかったりもする。子供の頃の記憶なんて
そんなもんだらう。

と、その時……



「……？」

椿さんが、私にひざ掛けを被せた。

「椿さん？」

「夫が帰ってきたみたいですよ」

なるほど……パンツ丸出しはまずいよね……。

すると、足音がこちらに近づいてきた。

……どんな人だろ……？もしかして、髭達磨なおじさんとか……。

「椿、お客様かい？」

男の人の声がふすまの向こうから聞こえ、ふすまが開いた。



そこに現れたのは、髭達磨なんて似ても似つかないスラツとした人だった。

「あなた、お帰りなさい。この方は、雪水ひなたさん。実はね……」

と、私に起きた顛末を椿さんが説明し始めた。……!?……なに……なに……?

旦那さん……ずっとこっち見てる……?

「……ひな……?」

なんか、私の顔を凝視してるんですけど!?!目を逸らしても、視線を感じる……。

「……ということなんです。ひなちゃん、私の夫です」

と、椿さんの話が終わった。

「あ、あの、ご紹介に預かりました。雪水ひなたです……。あの、ご厄介になります」

／＼

凝視されているが、沈黙するわけにもいかず挨拶した。すると旦那さんはハツとしたように反応した。



「ああ、これはご丁寧に、鬼蓮竜胆（リンドウ）といひます。大変でしたね。

どうぞ、ゆっくりしていつてくさい」

そういうと、竜胆さんは表情を和らげた。顔に傷があるけど……野良仕事とかで
やっちゃったのかな……？ いや……聞くのは野暮だよ……。

「それで、どうでした？ 土砂の方は……」

椿さんが、塞がった道について竜胆さんに尋ねた。そうか、そういうば夫が見に
行っているって言うってたっけ……。

「ああ、あれなら一週間もあればどうにかかなりそうだよ」

一週間……じゃあ、私は一週間ほどここに厄介になるってことなのかな……

結構長い……。椿さんはいいとしても……竜胆さんはどう思ってるんだろう……。

そう思い、少しバツの悪い表情を浮かべてしまった。と、

「雪水さん！」

「は、はいい!？」

いきなり呼ばれ、声の上擦った。慌てて竜胆さんのほうを見る。

すると竜胆さんはニコツと笑った。

「遠慮なんかしないてくださいいよ？」

「え、あ、は…はい」

椿さんと同じことを言われた。椿さんの方を見ると同じようにニコツとしていた。「久しぶりのお客さんですし、私は最近仕事で家を空けることが多いので是非、妻の話し相手になってあげてください。女性同士の話は妻にとっても貴重ですから」

最後の一言が少し気になったが、私ははいと頷いた。

「ありがとうございます。それじゃ、私はこれから仕事に出ますので」

そう言って竜胆さんは再び出かけていった。



「……優しいそうな人ですね」

「はい！私の大切な人です」

惚気られた……。

「……ところで、なんで竜胆さん、私の顔をあんなに

凝視してたんですかね……？」





「……ひなちゃんのこと、気に入ったのかもしれませんね……」


「……駄目ですよ？……誘惑してとつたりちや」

「は!?! いえいえいえいえ! ありえませんが! こんな太眉!」

「それに誘惑なんてそんな大それたことできませんから!」

「い、いきなり何を言い出すんだこの人は!?!」





「ふふふ…冗談です。なんとなく理由は分かりますけどね…。」

あの人のことを一番知っているのは私ですから」

「じよ、冗談…。もう…やめてくださいよ…。」

しかもさらっとまた惚気られたし…。でも、理由ってなんだろう？

「ごめんなさい。反応が可愛くてつい…。」

さて、それじゃ、私は客間の整理をしてきますね。

その後、温泉に行きましょう」

「あ、はい。おねがいします」

それから程なく日が沈み、椿さんに支えられながら温泉に案内された。またおんぶされそうになっただけど、流石に恥ずかしくなつたから、肩を貸してもらおう形になつた。

温泉は、露天風呂。しかも、自然に囲まれ星空を満喫できるものだった。なんとという贅沢……なんとというグレートスプリング……。思わず、テンションが上がつた。

とりあえず、洗い場で痛みの酷くない方の手で体を洗つてから入ることにした。折角の温泉、入念に体を清めてから挑まねば……。

そして、遂に体を温かな温泉につける。温かさが体を包み、なんとも心地良い……。肌から温泉が沁みてくるようだ……。至福である……。



崖から転落なんて、とんでもない不運だったけど、温泉に巡り合えて私、幸せです……。心なしか、痛む箇所がどんどん治っていくような気がする……。温泉の効能かしら……。いやいや……。いくら温泉でもそんな即効性はないか……。と、椿さんの声が聞こえてきた。

「湯加減、いかがですか？」

「はい！最高です！」

「そうですか！良かったです」

「ここはどういった効能があるんです？」

「疲労回復や健康促進はもちろんですが、実は霊泉なんですって」

「霊泉……ですか？」

「はい、なんでも浸かるだけでありがたい効能が得られるそうです。

弱った霊力が回復したり、霊力の強い死者の霊が浸かれば、

実体を得ることが出来るとか、その昔、温泉好きの雪女が

旦那さんとよく訪れたなんて昔話も聞いたことがありますよ」

「ふへえ……」

何の話か良く分からんが、パワースポットってやつかな？

しかし、温泉好きの雪女とか……溶けないんかね……？



「でも、温泉好きの雪女なんてなんだか可愛いと思いませんか？」

「そうですねえ……そのギャップがなんとも……ん？」

「なんだか、声が急に近くなったような……？」

「……………」



「つ、椿さん!? 一緒に入ったんですか!？」

「い、いや、そんなに驚かなくても……けが人を水場に一人なんて

危ないですからね」

そ、そりやそうか……。



「別に、女同士なんですから変なことないでしょ？」

「そ、そうなんですけどね……なんていうか、椿さんの肌は白くて

綺麗で、なんか、つい比べちゃうというか……劣等感というか……」

「ひなちゃんだって、肌綺麗じゃないですか」

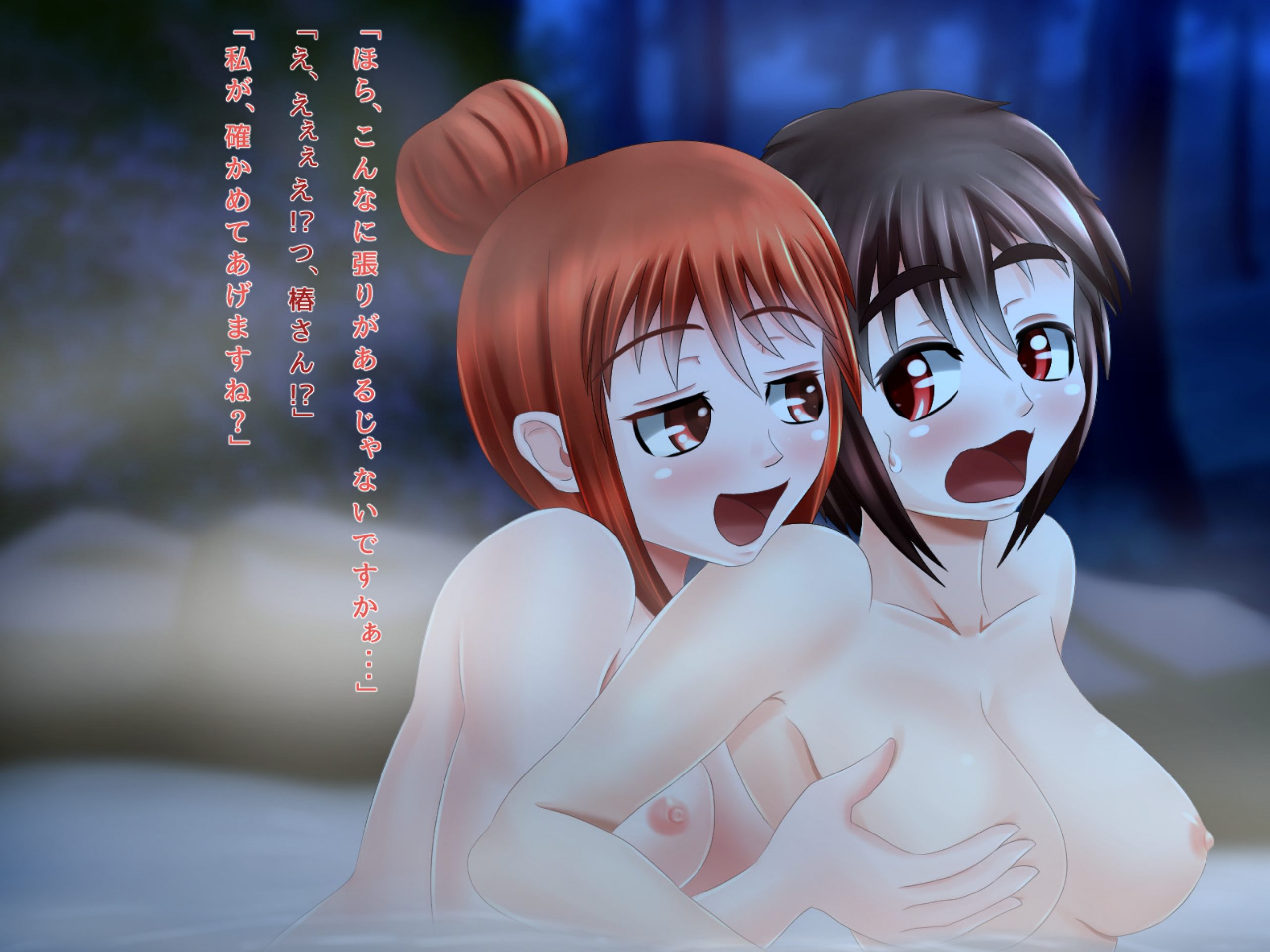
「あ、ありがとうございます……」

「というか、この人は独特のオーラがある……」

「なんていうか……人間離れしてるというか……」

「裸同士で、至近距離だと変に緊張して……」



An anime-style illustration of two young women in a bathhouse. The woman on the left has long, reddish-brown hair styled in a bun and is looking towards the woman on the right with a surprised expression. The woman on the right has short, dark hair and is looking away with a shocked expression, her mouth wide open and a tear on her cheek. Both women are unclothed. The background is a soft, blue-toned bathhouse setting.

「ほら、こんなに張りがあるじゃないですかあ……」
「え、ええええ!? つ、椿さん!」
「私が、確かめてあげますね?」